Title	経済学を学ぶ
Author	佐々木, 信彰
Citation	経済学雑誌. 別冊. 105 巻 1 号
Issue Date	2004-04
ISSN	0451-6281
Type	Learning Material
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学経済学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

巻頭言

経済学を学ぶ

平成不況も10年余りも続くと，我々は不況に慣れ切ってしまって，むしろかつて経済の高度成長やバブル経済が本当にあったのかと，訝るほどである。青少年の失業率は10パーセントを超え，大学生の就職も儘ならない。経済成長の回復の兆しが輸出の好調と，企業の設備投資の一定の増大によって見られるが，消費は一向に回復する気配がない。

「Japan as number 1」（エズラ・ボーゲル）と賞賛された日本経済が凋落した原因はどこにあるのか？　日本経済の「成功」は単に先行する欧米への模倣とキャッチ・アップにすぎなかったのか。「成功」に驕り，21世紀への準備を怠った報いか。先頭に立って，未来を切り拓く創造力を日本は持たないのか。自虐的にまでも反問する論説がマスコミの主潮である。

確かに今の時代は楽観できないが，悲観しきることもない。社会・経済のあり方が構造的変化をきたしている現代は，明治維新，第二次世界大戦の終結に次ぐ第三の社会・経済の大変動期と見立てることができよう。外からはグローバリズムの衝撃，内には右上がり成長の終息と高度高齢化社会の到来，社会・経済はギシギシと音を立てながら変わっていく。価値観も変化を余儀なくされる。このような時代に遭遇した時，多くの困難と辛苦が我々に襲い掛かる。こんな時に，時代を呪うのか，それとも毅然として時代に立ち向かうのか。大変動期はプラス思考で「チャンス」と考える勇気を持ちたいと思う。

時代には表に見える大きな流れが，伏流するもうひとつの流れを隠している。これからの10年，さらに20年，日本の社会・経済は20世紀のそれから根底的に変るだろう。アジアとりわけ中国の台頭が顕著になる。世界の社会・経済も変る。世界に占める日本のポジションも変らざるを得ない。

高校を卒業して，大学に進学する時，時代の影響を受けて学部選択をすることはよくあることである。文系の中では，この４月からロースクールが開校する法学部，会計・商学などの実学系学部，理系では医療・介護・福祉系に人気が集まるのはそれだけの時代背景が存在する。そのような中で，経済学部を選んだ諸君の選択理由は何だろうか？

37年前に経済学部を選択した先輩として，また経済学を教えることを職業とする者として，一言申し上げたい。「経済学は時代と社会・経済を読み解く鍵となる学問であり，社会科学の中心的学問である。経済学は広くまた深く，学べば学ぶほど本当に面白い。」

経済を学び知るには，素材と機会に事欠かない。アルバイトをすることも良いチャンスである。お金を稼ぎ，消費することから留学生と語らい，アジアさらに世界を旅することまでいくらでも

切っ掛けはある。但し，本当に経済がわかるためには，地道に経済学を学び，学んだ経済学で生きた経済を説明する。この繰り返しが欠かせない。

時代の長期トレンドを読み，複雑な社会・経済を分析して，より良き社会，幸福をコーディネートする学問，それが経済学である。経世済民の術である経済学は，時に「憂鬱な科学」とも謗られるが，大変動期のいま，経済学部に入学した諸君は，経済学を学ぶことに大きな誇りを持ってよいのである。

2004年4月

大阪市立大学経済学会会長
佐々木信彰